

昭和51年5月9日第三種郵便物認可・昭和51年7月1日発行（毎月1回1日発行）通巻56号

# ヒマラヤ

HIMALAYA

1976年7月号

75/8/21  
ガガリン  
27-16トン



日本ヒマラヤ山岳協会——HAJ

HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

# ◆◆◆◆ HAJヒマラヤ集會 ◆◆◆◆

## 〈東京定例集會〉——予定——（無料）——

毎月第4金曜日 18時30～20時

毎月第1金曜日は、自由集會です。ヒマラヤに関する個人的な相談、ご友人との打合せなどにHAJ東京事務所をご利用下さい。なお、毎週金、土の13時～20時まで事務所はご利用できます。

7月23日 カシミールの街と山

HAJ出版の上記の本（600円）持参のこと

8月は休み

9月3日（第1金曜、24日は休み）ガルワル山麓

10月22日 ネパール・トレッキング情報

11月26日 アッサム、ビルマ、ダージリン

12月3日（第1金曜、24日は休み）

ネパールの旅、トレッキングのガイド

HAJの「ネパールの旅」(600円)の本持参のこと

52年1月28日 アフガニスタンの山(ワハン隊速報)

2月25日 中央アジアの山々

3月25日 インド・ヒマラヤ情報

## 〈北海道定例集會〉——予定——お茶代・実費——

毎月第1月曜日 18時頃から、札幌市北1西4棟向 喫茶「ねむの木」の3階特別室でおこないます。奇数月定例、偶数月自由集會

問合せ先 大崎正信理事

## 〈名古屋定例集會〉——予定——（無料）——

毎月第2金曜日 18時30～20時

於：名駅前 ホテル・ニューナゴヤ 747号

（7階）エア・インディア名古屋

7月9日 カシミールの街と山

HAJ出版の上記の本（600円）持参のこと

8月は休み

9月10日 ガルワル山麓の旅

10月は休み

11月12日 アッサム、ビルマ、ダージリン

12月10日 ネパールの旅アドバイス

HAJの「ネパールへの旅」(600円)の本持参

52年1月21日（第3金曜、14日を変更）

アフガニスタンの山（ワハン隊速報）

2月18日（第3金曜、11日を変更）中央アジア

3月11日 インド・ヒマラヤ情報

## 〈大阪集會〉——（無料）——

6月12日 17時～19時、ヌン登山隊報告、ラダック

於：大阪市労働会館（国鉄大阪環状線森ノ宮駅下車、日生球場東隣）担当 田中重義

## —— 主要目次 ——

- |                         |    |                       |    |
|-------------------------|----|-----------------------|----|
| ● HAJ秋のヒマラヤ集會案内……………    | 1  | ● ヒマラヤ学入門 その41……………   | 14 |
| ● 専務理事就任にあたって……………      | 1  | ● ヒマラヤに関する質問と解答……………  | 14 |
| ● インドの北辺境〈2〉……………       | 2  | ● HAJヒマラヤ遠征委員会報告…………… | 15 |
| ● ザスカール山群の旅……………        | 6  | ● 世界の屋根を行く〈1〉……………    | 16 |
| ● ヒマラヤ閑話—6 ミニヤ・コンカ…………… | 11 | ● 新刊・旧刊……………          | 19 |
| ● 関係の民族音楽レコード目録……………    | 13 |                       |    |

緑の高原でヒマラヤを語りましょう＝誰でも参加できます

## HAJ 秋のヒマラヤ集会の案内

- 〈期日〉 10月9日(土) 10日(日) 11日(祭)  
2泊3日
- 〈場所〉 ハケ岳山麓中央高原、樫の木荘および阿弥陀岳(登山) 〒399-03 長野県諏訪郡原村字原山17217-565  
電話 02667-9-2311・2312
- 〈交通〉 中央線茅野(ちの)駅下車、バスで原村合同庁舎下車(払沢または中新田行、40分位250円)→樫の木荘へ  
タクシーなら17分 2500円位。  
車の場合 大月-富士見(国道20号)→樫の木荘へ。なお、9日の夕方と10日の早朝に1便ずつバスをチャーターする予定です。それに合わせておいで下さい。待合せの時間は申込者に汽車の時間ともにお知らせします。
- 〈申込〉 日本ヒマラヤ協会名古屋事務所へハガキか電話で。〒468 名古屋市天白区  
宿泊日、到着予定時刻、参加者氏名を明記して下さい。折返し、案内パンフレットなどお送りします。
- 〈メ切〉 8月末日、先着順40名でメ切ます。
- 〈費用〉 1泊の場合5500円(小人4000円)  
2泊の場合9500円(小人6500円)  
宿泊、食事、行動食、間食、会議費、チャーターバス代(2便)を含みます。交通費は各自。費用は当日受付でお支払い下さい。
- 〈内容〉 ヒマラヤ最近の話題、小登山、ハイキングをハケ岳連峰西麓の裾野に広がる緑の高原で楽しめます。登山をなさる方(10日早朝発の日帰り)はそのつもりで非常食、登山装備をご持参下さい。1975年HAJガルワル隊々長、清水澄さんはじめ多くのヒマラヤニストが皆さんのお相手をしていただけます。大いにヒマラヤを語りましょう。
- 〈日程〉 10月9日樫の木荘集合。受付19時~21時  
総会と夕食会。  
10月10日、日帰り登山やハイキング(雨天の場合はヒマラヤの話やスライド、室内ゲーム)  
10月11日朝食後解散(自由行動)

## みんなのヒマラヤの再確認から

### 専務理事就任にあたって

岩水竜峰



去る4月4日、日本ヒマラヤ協会昭和51年次総会において、会長の委嘱を受けHAJ第3代目専務理事に就任、向こう3カ年間、光栄ある職をお引受けすることになりました。

当初、私はこの職をお引受けすることに、非常に困惑と戸惑いを感じ、何度も増田前専務理事及び沖氏と話し合いを重ねてまいりましたが功をな

さず、こういった結果になってしまい、今でもある種の不安を感じております。と申しますのは、この協会には、私よりもはるかに会長を補佐し皆様方をリード出来る素晴らしい人材が多くいらっしゃって一例えば多くのヒマラヤ経験者や学識者及びすぐれた登山家、トレッカーととても私などではこんな大役には、不適任者と思っていたから

です。

しかし、こういう結果になった現在、私は私なりに会長を補佐し精一杯努力してみたいと思っております。

私は、現在の日本人に何が一番欠けているかがあるボランティアを活動通じて考えてまいりました。それは、あまりにもウェスタン・セオリーに傾斜した、日本人の思索を見なおし、独自の日本人観の確立を図り、アジア人同胞としての理解と交友を深める必要があるとの結論に達しました。協会の皆様方の中にも、一度インドやネパールさらにパキスタンを旅した際、そう思われた方々が多数いらっしゃるのではないかと思っております。広い意味でアジアから再度日本を見なおしたと多くの人達は語っておられます。そこには、精神文化を基調とした近代化への歩み、考え方、さらに我々の魂を奮い立たせる大地、素朴な人々の生活が、一度は興味本意から、しかし、時が立てば、良い反省材料となり我々の血となり骨となって明日の生活の糧となってくるように思います。色川大吉氏は「ユーラシア大陸思索行」の最後に……それはともあれ、日本の若者達よ、海外に出よう。そして、無辺の曠野の中に魂をさらそう。……と結んでいます。

私はまさにその通りだと思っております。協会の使命の一つは、そういった意味あいがあり、その実践団体でありたい。幸い15周年に向けて、「夢とロマン」を秘めた遠大な計画がスタートし始め、協会できなければならない仕事が多数あるように思います。登山にトレッキングに探険に秘め

られたヒマラヤの空白部に多数の足跡を残し。そして學術の一端に寄与し、ヒマラヤをめぐる諸国と我国の親善のイニシアティブを取るような団体であってほしいと思っております。

先日の総会において、「日本ヒマラヤ山岳協会」の名称から「山岳」を取り、「日本ヒマラヤ協会」としたいとの意見にたいし、全員一致で可決されたことを想い返せば、会員の胸の内には、私と同様なお考えの方が多数いらしたのではないかと思っております。

しかし、現在のH A Jをいろいろな角度から眺めてみますと人材と地域性は、非常に優れていると思われまふ。しかし、それが十分に発揮されていないのではないのでしょうか。もう一度原点に戻り「皆んなのヒマラヤ」を再確認しようではありませんか。そういった意味から各地の理事の皆様方に依頼し、札幌・東京・名古屋のような「ヒマラヤ集会」を各地で開催したい。〈ヒマラヤ集会の充実〉とそれによる〈会員一人が一人を勧誘〉をし、これにより、もっと会員が増加定着するのではないのでしょうか。また、〈社団法人化〉をすすめる岳界のみならず社会的に有益な団体をめざし関係各機関と相談の上、会長および各理事の皆様方と相談し努力してみたいと思っております。最後に全国に亘る会員を掌握することは至難の業です。中央集権ではなく地方分権の確立を計り、各人各様の実績がH A J全体の評価につながるような協会にしようではありませんか。以上皆様方の御協力と御援助をお願いいたします。

## インドの北辺境—〈2〉

フレドリック・ドリュー

( The Northern Barrier of India  
by Frederic Drew の第17章・18章よりの抄訳 )

〈ラダックの住人〉

ラダックは地図上で赤茶色でぬられた、人の住めない高地に囲まれている。その範囲はどの方向にも320kmはある。

人の住んでいるところは2つの地区に分けられる。チベット族地区とラダキー(Ladakhi)とチャ

ンパス(Champas)族の地区である。チベット族は家に住み、チャンパスは遊牧民でテントで生活していてシーズンによってあちこちと移動する。

ラダーク人はトゥラニアン(Turanian)のカーストと同じようなふるまいをし、Chineseと呼ばれることもある。トゥラニアンは中国人と生活な

どがよく似ているからである。頬骨は高く、顔はあごにむかって細くなっている。あごは小さくひっこんでいる。目に特長があり、一重まぶたでたるんでいる。目はかっ色である。口は大きい、くちびるは厚くない。かみの毛は黒く、前がみを切り、うしろの髪はたばねている。口ひげはたいていつけている。背はヨーロッパ人よりも低い。男156cm、女150cm位が平均値である。

ラダック人は愉快で、機敏で、良い性格である。酒を飲んだときケンカもするがあとはカラッとしている。器用ではないが素朴でぶかっこうである。うそはいわない。のみこみは悪いが時間をかけて話をすればよく納得する。

着物は簡単なもので、すべてウールであるが、ごつごつして厚い。ホームメイドのくすんだ色をしている。男は“チョガ”(Choga) とよぶ長いコートをかきている。前で2重に合せ、腰のところに帯でむすんでいる。下着はきていない。靴をはき、帽子をかむる。そのうえに毛布のようなものをかかっている。特別な、うしろの長い帽子は最近をかむらなくなった。この帽子は昔、Sokpoの侵入者がやってきたときIbrahim KhanのもとにカシミールのMugal軍がラダックを助けにきたときにはじまったものである。そのとき馬のくつわ“tobra”をおとしたのをひろい、それをラダック人がかむったのがおこりだといわれている。

最近の帽子は子羊の毛で作った耳おおいのあるものである。夏には耳おおいは上にまくり上げ、冬は寒さをふせぐために下にさげてかむる。

靴は大切なものである。岩だらけの道、そして寒い冬、雪の上を歩くからである。厚い皮で底を作り、ふちも皮で作る、フェルトまたは布でこれにつなぐ。くるぶしまである。足はフェルトのゲートルで保護される。“チャウスール”(Chaussure)と呼ぶ。岩がかわいていれば岩登りにも悪くない靴である。

女はガウンをきる。少しひだのあるスカートをはく。普通、青か赤色である。羊の皮のショウルのたぐいを肩にかけている。内側にはウールがついている。貝がらや大きいトルコ石のかざりのついた布をかむっている。男と同じような靴をはいている。

着物は男も女も、夏も冬も一緒のものを着ている。

ラダックの中でカーストらしいものは次の2つ

である。カジ屋と音楽師はカーストが低い。カジ屋の方が低い。低いカーストの人をBemと呼ぶ。たいてい近親結婚をする。ラマの教義ではカーストは作らないからである。

#### 〈チャンパス人〉

チャンパス族の人はすみかは高い処にあり、インダスの谷の上の村ルプシュー(Rupshu)などである。彼らはラダック人とあまりかわらない。顔が少しちがっていてアゴが突き出ている。大変強くてゆかいな人たちである。きびしい寒さの中で生活している。貧しい暮らしであるが精神的には立派である。1日の旅の終りに火にする少しばかりの木を集め、夜の食事を作る。たのしそうな笑い声は人の良さを表わしている。テントに生活している。1カ月か2カ月同じ場所にとどまったのちまた、別のところへ、羊の群を移動して行く。

着るものはラダック人と一緒である。ウールの布のかわりに長い子羊の皮のコートを着ることがある。

チャンパス人とラダック人は昔からのしきたりとして決して結婚しない。宗教は同じだがチャンパス族の男はラマにならない。数も少なく全部で100家族くらいである。民族学的にはラサに住んでいる人と同じである。“カンバ”(Khamba)と呼ぶ人も来ることがある。ラサの東がふるさとである。その土地をカーム(Kham)という。チベット系だがチャンパスの人とは言葉がちがう。しかし、理解できる。カンバは職業的乞食ともいえる生活をしている。冬にはインドへ出ることもある。女房子供をつれての乞食である。小さいテントに住んでいる。大人がやっとすわれる高さである。羊の背に荷をつけて移動する。あるものはパンゴン湖(Pangkong)のそばに定着して農業を細々とやっていたが、やはりテントに住んでいた。

#### 〈ラダック人の生活〉

ほとんどのラダック人は農業である。芸術家が少しいる。商店主も少しいるが彼らはムハマダン(Muhammadan)とラダック人との間のカーストであるかまたはよその人である。多くは自分の土地をもっている。1家で2～4エーカーである。広い土地をもっている者もいて、それは労働者をや

とって仕事をさせる。土地の税金は大地主をのぞいてほとんど無料である。大麦がほとんどで主食となり、4572mのところでもできる。しかし、村は4180m～4270mにある。小麦もとれるが、それはあまり食べないで町の人に売る。小麦は3505までしかうまくとれない。最高3901mである。豆もとれる。

3200m～3050mのラダックの低いところでは、大麦とアワがとれる。米はラダックではとれない。試作したが10cmしか育たなかった。どこでも権限が要求されている。もし、水が充分あれば穀物はもっと実る。太陽の光はあまるほどある。ザスカールでは近くにもっと雪のあるところがあり、そこでは太陽のあたたかさがもっと欲しいのである。耕作はヤクと一般の牛の交配した動物でやっている。“ゾォー”(ZO)と呼ぶ。めすは“ゾモ”(ZOMO)という。ヤク自身は農耕には適さない。しかし、荷を運ぶにはよい。

食物は大麦の粉で作ったものをあたたかくして食べる。バターやミルクをつけて食べることもある。食事は1日3回とる。日の出あと1～2時間に大麦のスープ、お昼頃に練った生パン、日が沈んでから大麦のスープをまた食べる。1日に約1kg食べる。スープには野菜、肉、お茶を入れることもある。

動物を食物にするときは口をふさぎ窒息させてころす。血をスープに入れてあたたためて食べることもある。

ラダックの酒はチャン(Chang)である。ホップのない、かるいビールの味である。いい入れものがないのですぐに酔っぱくなる。寒い冬に好んで飲む。ウイスキーの一種も作られているがこれは法律で禁止されている。一度、チャンも造れないことになったが寒い冬はチャンなしではすげせないで、今はオープンになった。お茶もよく飲む。バターを入れかきまぜて飲む。

こんな粗末な食事だが実に強い。クリーは女でも強い。1日に40kgかついで30kmほど歩いた。そして着いたときは笑いながら歌をうたっていた。寒さにも強い。ザスカールの人も強い。凍るような夜でも毛布一枚でまるくなり岩の上で平気で寝ている。1年に1回は風呂に入るといふ見た人は少ない。着物も決して洗わない。そして、小さい布切になってしまいうまで使いに使う。木をた

くわえている。ブルツェ(burtse)と呼ぶ小さい長い木である。地下の根がよい燃料になる。高いところでは“ダマ”(dama)と呼ぶ、ハリエニシダの一種が燃料になる。丘には杉の木の種類がありよくもえる。柳もよくそだつ。しかし、住んでいるところからははなれているので集めるのに苦労する。

家は天日でかわかしたレンガまたは石で作る。平らな屋根をしている。2～3階建である。しかし、大変低い。貧しい家を除いては客間がありきれいにしてある。お客がくるとフェルトの上にカーペットをひき、できるだけのもてなしをする。家はすべて白くぬられる。ベランダやバルコニーはあかるいところにあり楽しい場所となっている。金持の家には仏事をおこなう仏間がある。

レーの王宮は多分この国で一番立派な建物である。それに次ぐ立派な寺院もある。王宮の部屋は大変不規則にできており、各階はつづいていない。しかし、すべての部屋は細い、天井の低い廊下でつながっている。2～3の大きい部屋もあり、そのうちのあるものは真中が天井がなく空が見える。冬に大きい火をたくからである。インド式の方法コラム(欄)でこの天井はささえられている。木造であり、けばけばしい色がぬられている。壁には画がかかっている。

インドの人はラダック人の女性が実に自由であることを見ると不思議に思うのであるが、これはラダックの女性が男と同じような仕事をしているからであり、ヨーロッパの人々と同じことなのである。荷物を男と同じにかつぐことは前記したが、農業でも種まきから耕すことまで男と一緒にやる。男が外に働きに出ていれば女だけでやる。女性の地位はインドよりも高い。しかし、一妻多夫が金持をのぞいては普通である。一夫多妻はほとんどない。多分、ラダックの土地が少なく、分けることができず、それに宗教的、習慣、言葉などが孤立していたからであろう。兄が結婚すれば彼女は兄弟みんなの奥さんになる訳である。子供はみんなが父としてみとめる。若いお父さん、年とったお父さんと呼ぶ。3人の兄弟の妻がのぞめば他の家からもう1人4人目の夫をもつこともできる。したがってラダックでは人口があまりふえない。

息子に妻がきて子供ができるとおじいさんおばあさんは家やすべてを息子にゆずり自分たちは家

をはなれる。近くの小さい家に移る。2～3頭の家畜をもらい、2人に充分な土地を少し借用する。これをしてからは息子に何も文句もいわない。2人の父が生きているときも、両方共にこの方法をとる。

ボート族(Bhots)の人たちはほとんど読み書きができる。長い冬の間は農業がストップし室内にいる機会が多いからである。1人くらいは息子がどの家族からもラマになっているのでこのような初等教育をすすめるたしになっている。

ラダックのどの村にも大事なものがそうでないかは別として、寺院があり、1～2人のラマ僧がいる。100人いることもある。ラマ寺は村からはなれており、しばしば登って行くのにむつかしい高いところにある。山のいただき、孤立した岩の上、そびえたった崖のかくれ場所などである。

寺の入口にはマニ車がかげられている。垂直な軸に筒がつけてあり、まわるようになっている。中には尊い経文や名前の書いた紙が入っている。

このマニ車は水車でいつもまわるようにしたものもある。ヌブラ谷には直径1.2m、高さ1.8mのものがあって水車でまわっていた。

ラマ教の始祖ブッダ(Buddha)を彼らは“サクヤ・トゥッパ”(Sakya Thubba)と呼ぶ。仏さんのある部屋には沢山の小道具がある。ベル、ランプ、笏(しゃく)、袋に入った粉、バターのボウルなどである。壁は絵でかざられている。

大きな家族では少年の一人がラマになる。最初小さいときに寺の門徒となり、やがてラサへ行き、勉強を仕上げる。寺には2人のヘッドラマがいて1人は精神的なリーダーで、もう1人はいろんな行事をつかさどるマネージャーである。後者を、“チャジット”(Chagzot)と呼ぶ。ラマは毛のガウン“チョガ”(Choga)をきている。

黄色と赤色をそれぞれのセクトにふさわしい着物を着ているが、ラダックでは赤の方が主導権をもっている。頭をそり、何もかむらないが高い位の人はいろんなデザインの帽子をかむる。

ラマはたいい手に小さいマニ車をもっていて手でまわしている。これを廻すということは祈りをささげていると等価なのである。

たいいの寺はその村からのおふせでまかなっているが、あるものはラサからもらっている。寺だけでなくラダックではどこでも宗教的な“しる

し”を見つけることができる。岩にほりつけたものもある。カルギルの上のサンコ(Sanko)の村に見られる“チャンブ”(Chamb)の立像を岩にほった仏像は約8mの高さがある。

しかし、多くは平らな石に経文を書いたものを積み重ねたものであり、“マニ”と呼んでいる。どの村にもあり、また、しばしば道路のわきにもある。ここを通る人はその右を通らねばならない。

しっくいと石とで作られ、絵がかいてある門のようなものがあり“カンニ”(Kagani)とよばれている。村の入口や家の入口にあり、その中を通って行くようになっている。これによく似たもので記念の意味として立っているものは“チョルテン”(Churten)という。

他の習慣は山の上などのアイベックスの角、羊の角などをつんだ岩がある。それには小さい経文を印刷した旗がむすびつけられている。

#### 〈ラダック地域〉

ここではDras, Zanskar, Nubraのことにについて記すことにする。ラダックの北東方面を見ると台形のコンロン(Kuenlun)高原とリンツタン(Lingzhi thang)が2つの丘で分けられてあるのが見える。すべてまわりは山に囲まれている。高原は4877m～5181mである。まわりの山々は6096m～6401mである。

この北の国境を形成しているものは東コンロン山脈である。高原の西にはムズターク(Mustaggh)とカラコルムの山々がある。これらはショーク(Shayok)谷とヤルカンド(Yarkand)川の上流の間にある。1.5kmとはなれていない両側に高い山々がある。西の方が東よりも高い。上部ショーク(Upper Shayok)のまわりには7620mの山々がある。北西には7925mがあり、これらの山々は氷河が発達している。

チャンチェンモ(Changchenmo)谷は4572m、パンゴン(Pangkong)で4267mある。これからショーク(Shayok)にそって下っていくが、谷の底は3048mである。少し下流でショーク川はインダス川に合流する。

ショーク谷とインダスの間の部分には大きな山脈があり、レー山脈と呼ばれている。このあたりも6096m～5486mの山が沢山ある。南東方面または平らな谷の部分で4572mある。北西には3048m

または3353mのところもあるが、谷はせまく、いろいろな傾斜でインダス谷へおちている。

分水嶺を形成する山々には氷河が沢山ある。6096～6400mのピークが見える。峠もある。北西にはヌン・クンのピークがある。そこからだんだん高原がおちてダラス(Dras)峠になる。チベットへ開けた一番低い峠である。(3444m)

この峠はカシミール側は大変標高差があるが、ラダック側はちょっと下るだけである。この峠をカシミール側からこえたとダラス谷(Dras Valley)である。草の多い谷で400m以下の巾である。まわりの山は岩山で道から1524～1892mもそびえていて標高は4877～5181mある。

ダラスの村では谷は広がっていて2～3kmの巾の平原になっている。長さは約5km。全部が同じレベルではないが、段々の沖積地である。

この草原には畑はなく、岩が多い。ダラス川はこの平原の入口と出口でせまいゴルジュになっている。このダラス谷はラダックの他の地域が乾燥し、晴天が多いのにくらべて湿気が多く、にわか雨が夏にも多い。峠の両側でかなりちがう。したがって冬もダラスは雪が多い。

カシミールの最終部落からこの峠をこえてダラスに入るには2日かかる。夏なら馬が難なくこえる。初雪はたいてい10月の終りか11月にやってくるがそれがあると道はとぎされる。

しかし、12月になり雪が厚く、かたくなると馬がまたこえられる。ダラスの人の案内が必要で、それに雪の落着くのを何日か待つことが必要である。5月まではとじてしまう。ダラスからカルギルの近くまでは同じ川に沿って道がついている。

タシガン(Tashgan)の下ではグラナイトのところへ出る。両側に山は高くそり立ち、頂上は谷から見ることができない。2743mくらい切れおちている。小さい杉の木の種類(Juniperus excelsa)があり、灌木もある。人々は“ウンブ”(Umbu)、ミリカリア(Myricaria)と呼んでいる。6月の中旬ならバラ科の花も咲いている。

ダラス川は北北西でインダス川に合流する。この川にそってどどん行くとバルティスタンへ出る。しかし、レーへ出るには川をはなれ右へ出てスル川の谷へ出る。ダラス川と同じくらいの水量がある。スル川を下って行くとカルギルへ出る。

(沖 訳)

## ザスカール山群の旅 ースルよりパイルガムへー

HAJ 酒田グループ ザスカール踏査隊

### メンバー

池田昭二(隊長・医療)、五十嵐 博(副隊長・渉外)、高橋毅(記録)、佐藤 力(食糧) 池田豊雄(装備)、工藤晃一(会計・渉外)

### 出発

7月30日にスリナガルを発った私たちは、1週間のラダックの旅を終えて、8月5日の夜カルギルに戻ってきた。

8月6日、車が7時に出るというので、5時に起きて準備をすませる。ジープの手配は昨夜、州政府ツーリストオフィスのサナウラ君と念入りに打合せを済ませたし、“万事俺にまかせてくれ”と胸を張る自信に満ちた彼の言に疑いをはさむものは誰もいなかった。

スルまで同行する広島隊の2人と酒田の4人がジープでスルに直行し、中間地点サンコーまで定期バスで行く広島、酒田の各2名を、ジープが折返し迎えに戻る、というのが今日の予定であった。

いくらおんぼろジープでも、5時間もかければスルまでの80キロは走破できるだろうと、私たちはたかをくくっていた。だが予定より1時間遅れて私たちの前に姿を見せたジープは、「一寸タイヤを取り替えてくる」と言い残したまま姿を消してしまった。「比処はインドなのだ」と自分に言いかけ、ふてくされて待つこと2時間。一向に悪びれたそぶりも見せず、にこやかな笑みをたたえてサナウラ君がジープで現われたのは、そろそろ太陽が中天にかかろうとする10時であった。

今度こそ出発である。氷河の水を集めてしぶきをあげるスル川の左岸にそって、がたがた道を一路真南へ走る。だが、荷台を含めてせいぜい4人が精いっぱいのところへ、大荷物もろとも8人がつめ込まれたとあって、あたりの景色どころではない。車からふり落されないためには、頭や肘の打撲くらい我慢しなければ、と懸命の努力が続く。10時50分、美しいモスクのあるトレスポンの村で一服。河岸一帯にひろがる大麦や柳の緑が目にし

みるのは、灰一色の荒涼たるラダックの風景に見馴れてきたせいだろうか。

## 殺気迫るイスラムの祭典

11時10分、サリスコットの村に入ったところで、行手の路上にたちはだかる数百人の群集に出くわす。血相を変えて男が何かどなっている。その陰悪な空気に思わず戦慄を覚え車をとびおりた。黒いヴェールで顔を覆った女たちが、逃げるように姿を消していく。男の怒号が私たちに向けられたものではないことを知って一応ほっとしたもの、殺気にみちた異様な雰囲気、に圧倒された私たちは、100mも離れた所から事態のなりゆきを見守った。老人から子供まで、男ばかりの群集の視線が一斉に一点に集中した。と、一条乱れぬ力強い歌の唱和と奇怪な踊りが始まった。踊りといってもそれは、肋骨も折れよとばかりに、左右のにぎりこぶしで自分の胸を強打する単調な動作のくり返しである。赤・青・黄、あざやかな色彩の布で覆われた三体の棺が土蔵から運び出され、これをとりまく群集の黒い塊が細長い流れとなって移動を始める。流れの方向にモスクがあった。棺がモスクに入ろうとするとき、熱狂的な歌と踊りは最高潮に達し、数百人の肉体からほとばしり出る熱気と響きはあたりの空気を震わせた。

突如静寂が戻り、われにかえる。今日はイスラム教の三大祝祭日の一つにあたること。棺は150年の昔、戦にたおれた3人の英雄のミイラであること、などサナウラ君が説明してくれた。

3時間前にカルギルを出たバスの連中は、さぞ心配しているに違いない。かといって連絡のすべはないし……。そんな事を考えているとき、突然ジープは前方に現われた満員バスを追い越し、やがて2台の車は相前後してサンコーに到着した。12時半であった。バスも2時間半遅れてカルギルを出たらしい。

プタンマ川がスル川に注ぐところサンコーは、ウムバラを越えてダラスに通じる道の分岐点でもあり、エンドウの花が咲く緑豊かな村であった。これより道は一旦右岸に移り、白雲母片岩の光る悪路を走る。10数分ごとに流れの水を汲んでは焼けたエンジンを冷やす。13時30分、左岸から注ぐ激流の渡渉で、危うく車ごと本流へ流されそうになり肝を冷やす。何とか危機を脱してほっとした

とき、全員車から降ろされた。水かきが増さない中に、バスの連中を迎えに行かなければならないからと、ジープは引き返していった。残された10数キロを空腹をかかえて歩く気はしない。食糧一切を後の連中に預けてきたことが悔やまれるがどうしようもない。麦畑の中に民家を探し、二枚のチャパティを恵んでもらって餓えをしのぐ。ヤナギラン、タンポポ、リンドウ……。花で埋まる草原に腰をおろし、どこからともなく集ってきた男たちから、現地語の講義を受けたりして待つこと3時間の後、やっと戻ってきたジープに拾われる。スル着17時30分。標高3220m。

## バトコル（4280m）を越える

8月7日、1時間余りの交渉の末、インドのヌン登山隊の高所ポーターの経験をもつ2人を含む7人のポーターと3頭のポニーの雇用が決った。だが、出発は何時になるか見当もつかない。準備のため家に戻ったポーターたちは、約束の時間が過ぎても姿を見せないのだ。

羽田以来ずっと行動を共にしてきた広島隊と別れをかわし、12時過ぎスルを後にする。ハクサンフーロの群落をかきわけるようにして、チャロン川の左岸を2時間登り、岩室のある草地で休む。ひょうきんな顔つきの狸に似た動物アリギルが、岩陰からひょいと姿を現わしてはかん高い鳴き声をたてる。

5573m峰から真北に張り出す支尾根を大きく巻き、ゴルジュを通り抜けるとモレーンが始まり、これを登りつめたところで広い河原に出る。17時40分。今日の目的地ドナラである。

夕刻から降り始めた冷たい雨はいつかあがり、星も出てきた。満足な地図も記録もないこの先の未知のルートを、うまくのりきることができるかどうかは、最大の難関と思われる明日の峠越えの成否如何にかかっている。高度順化はできたし、全員食欲も旺盛。あとは明日の好天を祈るだけだ。



バトコル氷河を登る

8月8日。5時にテントからはい出す。気温3℃。青空に映えてポバン(5666m)の白い峰が正面に屏風のようにたちはだかる。最初予定したポバンの氷河はかなり厳しいと見て、ポバンとチャルドンサー(5892m)を結ぶ稜線の鞍部を越えることにする。息が止るほど冷たいチャロン川を右岸に渡渉し、南から注ぐ支流ぞいに進路をとる。

草がとだえ山羊のふみ跡が消える頃、ヒマラヤひだの美しい装いをこらした山々が、次々と頭をもたげてくる。4000mのモレーンの上で昼食。これより南西にまわり込むようにバトコル氷河をひたすら登る。右手から荒々しいアイスフォール、左からチャルドンサーの西尾根が迫ってくる。

14時25分、ふいに前が切れて峠に出る。高度計は4280m。意外にあっけない峠への到達であった。ポーターは比処をムスカラと呼んでいた。

## ムエンスガールの大氷河を行く

陽はまだ高いし天気は上々。周囲の眺望をゆっくり楽しんで、と思ったが、緊張した面持のポーターたちは、しきりに先を急ごうとする。この先の氷河が大変なのだという。峠から100m下ったところで左手の岩稜が切れ、雄大な段状のアイスフォールを擁したムエンスガールの氷河が視野にとびこんできた。しばし、足をとめて恍惚と見とれる。一体この氷河はどこまでのし上げているのか。その源頭にはだかる山は何か。ヌン、クンとの地形的なつながりは……。地図がないのが口惜しい。

1時間で氷河のど真中に出る。4035m。これより氷河の本流をひたすら下る。下るにつれ無数のクレバスがあらわれる。クレバスは流れの方向と直角に裂けた幅1~2m、長さ100m前後のものが多く、その殆んどは何か跳ねて越すことができるが、ポニーは大変である。ポーターの1人が手綱をにぎって誘導し、1人が尻尾を両手で引っ張って舵をとる。渡れる場所を探して何百米もまわり道をしたり、岩を運んで橋をかけたり、まさに生命がけである。数年前イギリス人2人を呑みこんだのはこのあたりにちがいない。ポニーの尻尾のつけねから血が流れるが落として殺すよりはましである。

氷河が北西へゆっくり向きを変える頃、クレバスは縦縞のものが多くなり歩き易くなる。全員が



ムエンスガールの氷河を下る

後頭部の痛みを訴えだす。硬い氷を踏むときの震動が頭にひびくのだろう。3670m付近からモレーンとなるが、氷はかなり厚い。累々と続く岩礫に足をとられながら更に1時間下って、18時30分、氷河を脱出した。標高3470m。

氷河の末端カニタールは花と緑の楽園。とっておきの日本酒で第1関門の無事通過を祝った。山羊を一頭買ってジンギスカン鍋としゃれてこんだが、解体の過程を目撃したせいか全員食欲なし。

## カニタールの大草原に憩う

8月9日、今朝も太陽が眩しい。幅500mもある青々としたカニタール川の草原を、思い思いにのんびり下る。進むにつれ、エーデルワイス、ヨツバシオガマ・ハクサンフクロ……そして見たこともない色とりどりの可憐な花々が賑わいを増してくる。遠望すれば単調な緑の帯でしかないこの河原も、兩岸には押し出してくるモレーンあり、雪渓あり、美しい滝ありで、変化に富んで飽きない。山羊や牛とともに、人なつこい遊牧民の姿も目立って多くなる。

10時30分。模型を見ているような錯覚に陥るほどの美しい褶曲の層理を対岸に見て昼食。牛の糞を集めて、ポーターののどかな炊事が始まる。きらきらと青空をうつす小川で、裸になって汗を流したり、洗濯したりして、2時間をくつろぐ。

13時、左岸からの支流を渡渉し終えたところで、河原が大きく広がった。ローンマリゲイだとポーターが説明する。この盆地が40分ばかり続くと、左岸にバーザランの北尾根が接近し、きりたった断崖に二条、三条と豪快な滝が落ちてくる。懐しいダケカンバも見えてきた。



カニ  
ター  
ル  
谷

15時40分、右岸から大きな支流が合流。ドラップガーム(5574m)を源頭にもつ川らしい。ゆったりしたカニタールの流れはこれより次第に勾配を強め、のどかな牧野の風景は急速に渓谷の様相を深めていく。

今日の予定地ハンペットは、この牧野と渓谷の接点に位置する線の台地だった。大まかな地図にさえその名が記されているのだから、少くとも民家の数軒はある筈と、先頭を歩いていた佐藤と豊雄はこれを通り越して谷底へ下ってしまった。工藤が二人を呼び戻しに駆けおる。16時40分設営。

## 花の渓谷シナラへ

8月10日、深い谷を右足下に見ながら、ダケカンバの林をぬって急坂を下る。アザミ、タンポポ、シロツメクサの花畑に蝶がとびかううらかな風景をよそに、下りに弱いポニーは苦戦苦闘。ずり落ちる荷を何度も直しながら、40分下ってツォルカで一服。道はそのまま下ってインシャンから北上してくる本流との出合まで続くのだが、ここでカニタール川を横断できれば、6時間は時間を短縮できる筈。全員の視線を背に、ポーター頭のアッサム君が崖を下って渡渉点を偵察する。デブリのスノーブリッジが何とか渡れそう。逡巡するポニーをなだめすかして、一步一步断崖を下る。3030m付近で逆巻く激流を渡り、対岸の崖を北面にまわりこむように慎重に登る。高度をあげるにつれ、足の踏み場もないお花畑が展開する。まさに花の海である。赤・白・紫……色とりどりの花の中でもミヤマキンバイが他を圧倒し、草の緑ととけあって、山肌全体をうぐいす色に染めあげている。カルカのある台地で昼食をとった後、200m余りを一気に下って、スノーブリッジを対岸に渡る。流れにそって一筋の高巻き道が走り、道にそって自然石に草ぶき屋根のカルカが点在する。それらを通過するたびに陽気な遊牧民の歓迎にあい、つい道草をくってしまう。

右岸に渡って4本目の支流の出合がシナラ(3150m)であった。まだ陽は高いが、この先は峠へ向う厳しい登りの連続で、途中設営は不可能とみて、今日の行動を打ち切る。時間はふんだんにある。あたたかい午前の日ざしをいっぱい浴びて、花に埋もれて昼寝する者、身につけているすべてを脱いで洗濯するもの、カメラを手にあたりを彷徨するもの……。皆思い思いにうらかな草原の半日を満喫する。

## 第二の関門、シナララゴ(4,220m)

8月11日、第二の難関への挑戦の日とあって早目に出発。だが相変らずの抜けるような青空の下、全然緊張感が湧かない。第4支流にそっていきなり直登。ほぼ660m登って第3支流の大雪渓を南に横切ったところでティータム。さらさらと音をたてて流れる小川で汗をぬぐう。12℃。気温はそれほど高くはないが、強い陽ざしがこたえるのか、数十頭の山羊が群をなして雪渓で涼をとっている。第3沢にそってさらに厳しい登りが続く。色鮮やかな高山植物が苦しみを忘れさせてくれる。

13時丁度。ガスの去来する峠、シナララゴ(4220m)に立つ。ぜいたくなザスカール山群の大パノラマが、そこに私たちを待っていた。なんと美しくまた壮大な褶曲とそして地壘。何億年の間、休みなく造られ、氷雪に磨かれてきた見事な大自然の造形に圧倒され、しばらく言葉もなく、息のみ、時を忘れた。はるばる越えてきた東方の山々の一つ一つを目でたどる。累々と重なる山なみの彼方に、スピッツの耳のようにそば立っているのは、まぎれもなくヌン、クン。「46万円の眺め！」と一人がつぶやいた。たしかにこの一瞬のためにこそ、私たちは旅を続けてきたのかもしれない。硬質負岩からなる白い岩を集めてケルンを積み、峠に別れをつける。



シシナーク湖(奥の山は5136峰)

## シシナーク湖よりパハルガムへ

広い雪渓を430m下って清冽な流れのある花崗で休憩。ここから再び緑がよみがえる。見下す草原に一筋の道が白くうねうねとのびている。アマルナートへ通じる巡礼道路である。ポーターの足が俄然速くなる。急坂を駆けるように下り、巡礼者の列で賑わう大道に出た。木橋で清流を渡ると、10数軒の茶屋が並ぶ湖畔の宿場シシナークである。静かな山の湖シシナーク湖は標高3500m。南の5136峰から落ちる水河を呑みこんで、満々と水をたたえ、淡い緑色の光を放っている。このまま通り過ぎるにしのびず、ポニーの牧草が無いからと反対するポーターを説得して湖畔にテントを張る。

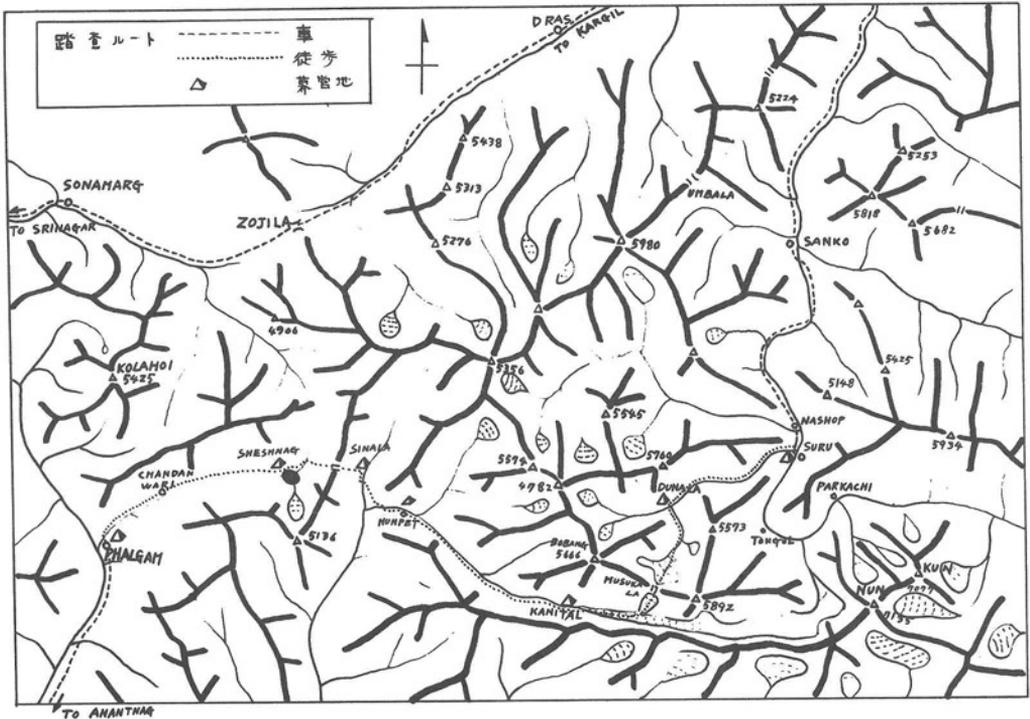
8月12日。標識によるとパハルガムまで17マイル。のんびり歩こう。シシナーク湖の水を落す渓谷ぞいに、巡礼道路を一路下る。1時間でゾジバル。比処からハンペットへ越える南まわりの道が出ている。ピスタップから急坂を下ると、針葉樹からなるうっそうなる森に入る。巨岩に飛沫を散

らす渓谷の眺めが、日本の山にいるような錯覚を抱かせる。

大名行列のように沢山のお供を従えた大金持、美しい民族衣装を着飾った貴婦人たち。かごに乗るもの、馬にまたがるもの。そしてボロをまとってはだしで歩くもの…。ひきもきらない巡礼者の列が続く。

11時40分、巡礼者と雲助でごったがえすチャンドラワリの宿場を通過。ここまでも車も入れるようだ。きび畑に囲まれたプレースマンの部落を過ぎる頃から雲ゆきが悪くなり、風が砂塵をまきあげたかと思うと雨が落ちてきた。しかしポーターは一向にあわてる様子もなく、薪を拾い集めて火を起し、チャパティを作りはじめた。大きな岩陰に身を寄せて1時間、彼らの食事につき合う。

15時、河畔に柳やアカシアが出はじめ、クルミの大木の陰に、れんが造りの家々が見えはじめた。懐しいニワトリの鳴き声も聞える。パハルガムはもうすぐそこである。山越えは終わったのだ。



## おわりに

日本を出る前に集めた資料から推して、またフィダ君やサナウラ君、そして現地の人々の意見を総合して、最低8日間とふんだスル〜パハルガムの山越えが、6日で楽に踏破できた要因は、何といっても恵まれた天気と献身的なポーターの協力であったと思われる。私たちが山を下りた直後、2100mのパハルガムに雪が降ったというから、山

は大雪に見舞われたに違いない。日程が1日ずれても、シナラゴでは吹雪に悩まされたであろう。

ところでパハルガムで別れたあの愛すべき7人のポーターと3頭のポニーは、その後どうしただろう。新雪をかぶった無数のクレバスをうまくのり越えて、無事故郷スルにたどり着けたかどうか、それだけが気がかりでならない。

お願い！ 「ヒマラヤ」38号（カシミール特集）を余分にお持ちの方はH A Jへ送って下さい。

## ヒマラヤ閑話 6

### ミニャ・ゴンカ

水野 勉

ミニャ・ゴンカは中国の西康省にあって、現在では外国人には閉ざされた山である。しかし、ミニャ・ゴンカ山群は現在でもかなり未探検あるいは未踏の地域であろう。北部ビルマ国境、ブータン・アッサム国境付近を含めた中国西南部地域の山岳地帯は依然として、ぼくらにとっては未知の地域であり、はるかなあこがれの地である。

ミニャ・ゴンカについては、日本でも戦前から知られ、いくつかの研究が発表されている。望月達夫氏が「ミニャ・ゴンカ山群」と題して、「山岳」第35年第2号に50ページにもわたって詳細に書いているし、雑誌「探検」には、アーノルド・ハイムの報告を小島一郎氏が翻訳して、2号、3号5号に掲載している。2号には小島氏が「ミニャ・ゴンカ」の山名について」という文章を発表して、山名について論議されている。戦後では、深田久弥氏が、有名な「ヒマラヤの高峰」第1巻において、「ミニャ・ゴンカ」を書いておられる。この地域の探検について知るには、望月氏の文章が便利である。各種の文献をしらべてよくまとめられている。

この文章をよんでおかしいと疑問を持たれた方もあると思うが、この山の名は「ミニャ・ゴンカ」なのか、「ミニャ・コンカ」なのか。どうも、この山の名ほどいろいろと論議されたものはない。これについては、望月氏も小島氏も紹介されているが、この附近を訪れた人びとの間でもいろいろと論議されているのである。これらの論議につい

てはおもしろいところもあるが、ぼくは山名考には不得手であるし、ここで述べるにしてはいささか煩瑣である。ただ、ここで「ミニャ・ゴンカ」を採用したのは、深田氏が採用しているし、中国隊も採用しているし、ハイムと同行したイムホーフも採用しているという単純なことからである。特に最後のイムホーフはハイムと同行し、ハイムの報告では「ミニャ・ゴンカ Minya GongKar」となっていたのに、今度、1975年に発行した本では、「ミニャ・ゴンカ Minya Konka」としているのである。このKonkaと綴るについては、イムホーフもその理由を述べているが、ここではやめておきたい。ぼく自身は少し前までは「ゴンカ」を採用していた。ここで改める次第である。イムホーフも書いているが、Kに近いGという音であろうと思う。これは綴りのことで、じっさいの発音はどちらにしても同じである。

さて、前書きが長くなってしまったが、じつは、エドワード・イムホーフの著者「Die Grossen Kalten Berge von Szetschuan」1975のことを紹介しなかったのである。著者は1930年、アーノルド・ハイムとともにミニャ・ゴンカ山群を訪れ、附近の地形測量に従事したスイス人である。1895年生れというから、当時は35才であった。現在81才である。この本はA4版ぐらいの大版の本で、ミニャ・ゴンカ山群の探検史（自分たちの紀行をも含めて）を述べ、専門の地形などに関する調査研究を掲げている。学術報告といった感じである。

圧巻なのは巻末に付けられた数枚の地図であろう。特に最後にあるミニャ・コンカ山群の10万分の1地図は美しい。この地図をみて気づいたのは、山の高さとな名である。ハイムの地図と比べるとだいぶちがっている。山の高さについては、1章を設けてその測定の方法についてかいている。山名はロックの付けた名などは変えられている。高度は「ヒマラヤの高峰」掲載の概念図とちがっている。イムホーフは、ミニャ・コンカを7600メートルとしている。ルチュ・コンカについては7100メートルとしている。

けれども、この本の特異なのは別にある。それは、数多く挿入されている水彩画である。全部で19枚あるが、大部分が山の画であることはいうまでもない。書き手は著者のイムホーフであるから驚く。かれはすぐれた地形学者であるばかりでなく、画のうまい趣味人である。それらはすべてカラー版であるが、それ以外にスケッチが数多く揚げられていて、このどちらかといえば固苦しくなる本を楽しめるものとしている。住民、村、寺院、風景、器物と目につくあらゆるものに興味をもって描いているようである。もちろん、写真も豊富であるが、一見画文集のような趣きである。1924

年のエヴェレスト遠征記録には、やはり、絵が数点揚げられているが、あのようにつけ足しみたいなものではない。本の中に画の占める位置がちがうのである。この本では画が主人格である。じつに楽しい本である。山岳書の中でも異色であると思う。

もう一つ特異な点がある。それは、1930年という45年も前の探検の報告を堂々と出版する態度である。しかも単なる紀行としてではなく、学術報告として提出するところに、驚くべき粘り強さがみられる。日本においてはまず考えられないことである。一つには、この地域が末だに「知られざる」地域であるからであろうが、それにしても学ぶべきものがある。報告が少しぐらい遅れてもいいのかもしれない。しかし、一方においては、そういう本を受け入れる側にもスイスと日本ではちがうのかもしれない。

この本はスイス山岳研究財団から発行されたもので、《Montes mundi》シリーズの第一巻として出されたものである。このシリーズは、かつてのMountain Worldにつづいて新しく企画されたものである。このシリーズがすぐれた本をつぎつぎと発行されることを祈ってやまない。

## H A J 1976 ヒマラヤ・ツアー

お問合せお申し込みは下記へー打合せは毎月第1,第4金曜日の東京定例集会(於: H A J 東京事務所)などヒマラヤ集会で。

主催(株)トラベル日本(一般登録67号)〒100 東京都千代田区有楽町2-2-1ラクチュウビル5F  
後援H A J・企画フロンティア 〒164 東京都中野区中央3丁目45-18沢本ビル1F

出発日	地域・ツアー名	期間(日)	費用(千円)	メ切日	定員	略名
7月25日	小チベット・ラダック	28	403	6月末	20	TIBET
〃	ザスカー	28	372	6月末	20	ZASKAR
8月8日	カシミールの旅	14	389	6月末	20	KASHMIR
〃	アフガニスタン	14	415	6月末	20	AFGAN
〃	ファミリーツアー、カシミールの旅	※ 14	369	6月末	40	SRINAGAR
12月26日	ネパールの旅	14	289	9月末	20	DURGA
〃	ガイドつきネパールの旅	14	372	9月末	20	KUND
〃	ファミリーツアー、ネパールの旅	※ 14	348	9月末	40	NEPAL
〃	ファミリーツアー、ガルワルの旅	※ 14	348	9月末	40	RANI
〃	ネパール・トレッキング	28	289	9月末	20	MODI
〃	山里先生とネパール・トレッキング	※ 28	493	8月末	20	PICTURE
〃	アッサム・シッキム調査隊	※ 28	約 400	8月末	20	ASSAM
〃	ビルマとダージリン	14	379	9月末	20	PAGODA

上記の日程や費用は51年6月1日を基準としており、航空料、現地の都合で予告なく変更することがあります。詳しい日程表などがありますのでご請求下さい。(※印はH A J 会員のみ参加可)

(5月31日航空運賃値上りのためツアー料金改定しました)

# 《ヒマラヤとシルクロードの音楽》

## 関係の民族音楽レコード目録

花 崎 洋

下記にあげたレコードはインド、ネパール、アフガニスタンなど、ヒマラヤやシルクロードに関係深い音楽や民俗的な音楽に関するレコードなどで日本のレコード各社（主にレコード協会加盟）から現在（1976，3，14）発売中のものです。

従って輸入盤については大手レコード小売店や音楽雑誌（レコード芸術とかステレオなど）で照会，調べて下さい。

掲載のレコードは，プロのラビ・シャンカールを除き，他は現地の人達の演奏です。曲目など詳しい内容は，レコード各社から出ている「総目録」をレコード店で見せてもらえます。その際，レコード番号（たとえば，PC 1541）と発売元のレコード会社名（たとえば，フォノグラム）を必ず言って下さい。注文時には再度番号を目録と照合して下さい。

レコードには「廃盤」というシステムがあって売行不良のもの，発売権の移動したものは製作販売を中止し，レコード店からひきあげてしまいます。民族音楽は，南米などのフォルクローレなどは別として前者の理由から「廃盤」になりやすい傾向があります。ここにあげた以前のものにそうなくなってしまった良いレコードがありました。

カセットやカートリッジ，オープンテープは少種類しか発売されていません。

目録のほかに，映画のサントラレコードで民族音楽利用のものとかS L（汽車）や鳥の声などと当会関係地域外の音楽も，大体レコード化されています。本多勝一の仕事も取材録音がレコード化されています。

中国のものもおそらく日本で輸入販売されているのではないのでしょうか。

今，はやりのBCL（海外短波放送局受信）に成功すれば文字どおりの生の音に接せます。Radio Nepal，22：00～23：00（日本時間）3,425M. Hz.

現地からの持帰りは17cm盤はともかくレコードが曲らぬよう一苦労します。安全なのはやはり自分でぶらさげてくることです。

㊦東芝EMI社から

TA9321～4 シルクロードへの道（トルコ，イラン，アフガニスタン）4枚組 ¥8,000 TA9316～8 インド音楽舞踏の旅 3枚組 ¥6,000 P 8267, P 8385, P 8530, P 8920, P 80433 各¥2,200 各ラビ・シャンカールのシタール演奏

㊧キングレコードから

GT5003 南インドの音楽 ¥1,300（以下同じ）

5007 インドの音楽 I

5014 " II

5016 トルコの音楽

5023 オリエンタルダンスの音楽

GXF5701 ヒマラヤ地方の音楽 ¥1,800（以下同じ）

5706 トルコの神秘主義音楽

5707 インドのサンタル族のうた

5709 東アラブの音楽

5710 アフガニスタンの音楽

㊨トリオレコードから

PA6040 オリエントの古典音楽 ¥2,000（以下同じ）

6043 オリエントの笛

6045 シタールの言葉

6070 ベンガルのうた

㊩日本フォノグラムから

PC1541 イラン古代帝国の伝統 ¥1,500

㊪日本コロムビアから

ZQ7051～5 アフガニスタン民族音楽大系5枚組 ¥11,500

ZX7006～10 オリエント民族音楽 インド編 各 ¥2,500

ZX7012～15 同上 南インド編各¥ 2,500

ZX7012～15 同上 南インド編各¥ 2,500

ZX7018 シタールの芸術 I ¥ 2,500

ZX7019 " II ¥ 2,500

XM II 神秘の国インドの伝統音楽 ¥ 2,000

71 アラブ諸国の民俗音楽 ¥ 2,000

XMS231～240 インド音楽の世界 各¥2,000

## ヒマラヤ紀行などの自費出版をしたい方へ

— 沖 允 人 —

どんな小さな旅でも、そしてありふれたコースのトレッキングでも、その人の思い出はその人だけのものであろうから、それを何らかの形で残しておくのは大切なことだと思う。その一つの方法として本にして出版するという方法がある。HAJでも過去いくつかの個人的報告書が紀行が出版されている。ヒマラヤ登山の報告書でも公式的なものより興味深く、面白いものも、このような個人的な本の中にこそ見出せるといってもいいくらいである。

しかし、本を造ることはなかなか大変なことで原稿を書いただけではその、10分の1にも達しないといえる。原稿はいわば料理の材料のようなもので、その材料を使ってうまい料理につくり上げることが本造りの面白さといえよう。同じ材料でも変った味の本が出来上がる訳である。

とはいえ、料理をするにはそれ相当のテクニックと根気と才能が必要である。だれでもという訳にはいかない。そんなことから、最近、本造りをお手伝いしますという会社がいくつかできた。本来なら自分ですべておこなってこそたとえ不出来な本であっても自費出版の価値があるというもだが、それができない人のために、自費出版を手伝ってくれる会社を2～3紹介しておくことにする。なお、本造りのことはいずれ稿を改めてどなたか専門の方にこのシリーズに書いてもらおうつもりである。

精興社 企画部制作部 〒101東京都千代田区神田錦町  
創業60年周年の記念事業として始めた由、連絡すれば「自費出版のしおり」をもらえる。

(株)勁草出版サービスセンター 東京都渋谷区道玄坂

最近「夜明けの国・中国への旅」柳沼晴二著などを出している。

日刊工業新聞社 出版局 企画部 東京都千代田区

調査報告など学術的なもの、数字や横文字の多い原稿に強いようである。

古川書房 書籍デザイン室 東京都大田区上池台

「岳人」によく広告が載っているのでご存知の方も多いと思う。HAJでも1971年の「カシミールの山」はここで出版してもらった。

人間と歴史社 東京都杉並区阿佐ヶ谷南

歴史ものが得意のようである。「出版のしおり。製作の手びき」などを連絡すれば送ってもらえる由。

どの社でも原稿を書く段階から指導をしてもらえるようである。値段は内容、部数などでそれぞれ違うが、そう高いものではない。プロの手になるだけに割付、編集ともにすっきりしたものになるが、しかし、要は内容がよくないと外見だけでも何にもならない。せいぜい良い本が出版されることを期待している。

### ヒマラヤに関する質問と解答

(問) ハスナイン博士と3年ほど前にガイドをしていたチャップリ氏の近況と住所をおしえて下さい。

(答) カシミールのハスナイン博士は博物館長は辞任されましたが、考古局の資料室の責任者としてカシミールの仏教史、考古学に関する資料の整理を主な仕事として元気で活動中です。ラダックのレーにも出張所があり、仏教史の謎を解く鍵があるともいわれているラダックのラマ教のことも精力的にご研究されています。昨年は「Moon Land Ladakh」という本をHAJの沖(元専務理事)他と出版されました。住所は以前と同じでNo.1 Gogji Bagh, Srinagar, Jammu & Kashmir INDIA です。

カシミールのガイドをしていたチャップリ氏

は主としてTCI という会社の仕事をしています  
ハウスボートの経営をしたりしていてもいます。住所  
ははっきりしません。

(問) カトマンズのラリグラース・ホテルやラン  
ンジャンさんの近況をお知らせ下さい。

(答) ラリグラス・ホテルはあまりお客が多くな  
く経営は苦しいようですが、一部を長期契約で貸  
したり、別にツクチェ・ピーク・レストハウスを  
市の中心に近いところに建てたりして多角的に仕  
事をしています。キラン・マン・セルチャン氏は  
ラリグラスホテルとともにアメリカ系のペンキの  
会社の経営者として腕をふるっています。日本語  
も忘れていませんし、まだ独身で以前とちっとも  
変らぬハンサムボーイです。

ランジャン氏は「ヒマラヤ」の広告にあるEx  
press Trekking 社などの経営、日本料理店「串  
藤」にも協力し、ますます発展しておられます。  
2人のお子さんのよいパパでもあります。

### 第5回HAJヒマラヤ遠征委員会要旨

時 : 1976年4月4日(日) 12時~13時

記録: 沖

所 : 東京都中野区中央3丁目,

スナック: シュール・ブルー

出席: 増田, 山倉, 近藤, 稲田, 沖, 松田, 植竹,  
岩水(オブザーバー)

#### ① ワハン隊経過報告(松田)

3月11日に日山協より推せん状が交付された。

(英文)

3月19日に日山協より和文推せん状が交付され  
た。すぐに外務省情報文化局, 在日アフガン大  
使館, 在アフガン日本大使館へ関係書類を発送  
した。また, 関係先へ, 有田隊長, 松田登攀隊  
長, 佐藤マネージャー他があいさつに伺った。  
国内手続はアフガンのビザ申請も含めて完了し  
た。

#### ② ヒマラヤ委員会よりワハン隊への要望(増田)

: 松田が了承した。

イ. 隊長の親族以外で, 連絡のとれ易い人をサ  
ポート役として決め留守事務局へ知らせてお  
いてもらう。(出発1カ月前位までに)

ロ. 現地連絡先を在アフガン日本大使館, 補助

的にカーブル市アリアナホテルとする。

ハ. 現地ニュースを定期的に留守事務局へ送る  
こと。これは「ヒマラヤ」に載せて協力者,  
会員に無料配布する。出発までに協力者名簿  
を提出のこと。

ニ. 保険の受取人を留守事務局の沖允人とし,  
契約に使った印章もあづけて行くこと。万一  
事故の場合の処理はヒマラヤ委員会に一任。

ホ. 各係の記録を遠征中事務局に残しておく。

ヘ. 隊の連絡は私的なものを除き, そのすべて  
のcopyを, 植竹, HAJ名古屋, 東京事務  
所の3カ所に送っておくこと。

#### ③ カーブルデポ品の件

35,000円の貸出料でワハン隊に貸出す, ただ  
し, これと同額をHAJの賤別金としてワハン  
隊へおくる。

#### ④ ワハン隊今後の日程

4月5日午後 東京で隊員会議

5月1~3日 青森県八甲田山で合宿,  
係: 松田

6月26(土)夜 宇都宮市の東日本ヒマラヤ研究  
会の席上を貸りて壮行会を開く。  
係: 稲田他

6月28日 アフガニスタンへむけて出発

9月~10月 帰国予定(現地解散)

10月10(日) 秋のヒマラヤ集会で帰国速報予  
定。

⑤ 隊員予定であった伊藤裕明氏は勤務の都合で  
不参加となった。出発までに日山協へ隊員変更  
を届出ることになる。

⑥ 増田委員は専務理事を退任するので委員を退  
任することになる。替って新専務理事の岩水竜  
峰氏がヒマラヤ委員会委員として加わる。

### 長谷川伝次郎氏逝去

1927年マナサロワール湖とカイラスを訪れ, ナ  
ンガパルバットやカシミールにも足跡を残した偉  
大なヒマラヤの先達は, 去る1月18日心筋硬塞の  
為鎌倉の自宅で永眠されました。東日本ヒマラヤ  
研究会の記念講演をお願いしていましたがそれも  
かなわぬことになりました。81才, 氏の大著「ヒ  
マラヤの旅」は東方界から復刻が出ています。

# 世界の屋根を行く——〈1〉

増田 秀穂

## 秘境 ラダック

今から28年前の1947年以来、外国人の立入を禁止していた中印国境地帯のラダック(カシミール州)地区の一部が1974年7月1日に外国人にオープンされた。ラダック地区は、雪の山々とインダス河の峡谷に囲まれた標高4,000m台の無味乾燥とした高原である。ラダッキーと呼ばれるチベット系の民族が住み、その大部分が熱心なラマ教の信者で、人々は素朴で善良、そして古い文化がそのまま受け継がれており、まさに生きている博物館である。そのため学術的にも貴重な資料が数多く埋没しており、世界の学者の注目を集めている。また私たち登山家にとってもただ単に禁断の国というだけでなく世界の秘境といわれるザスカールの山々や、ヌブラ谷、そしてラダック周辺の山々にひかれるのである。

1907年10月、陸軍少佐、日野強が軍事調査のため北京から天山を越えカシュガル、ヤルカンドを通りラダックの主都レーに入ったのが最初の日本人である。その時の様子を、「レーは山国唯一の大部落にしてヤルカンド嶺南の直下に位置し海拔一万一千二百六十六尺、人家約二百戸、一小市街を成形す、しこうしてこれが付近の人家を含みすれば約一千五百戸、住民の大部はラマ教信者たるポット人にて、東方にそびゆる高丘上には、崇巖なるラマ廟ありて、山中の一偉観たり。さればこの地方は、該宗霊場の一にして、これ小西藏の名のあるゆえなり。」と日誌に記している。(芙蓉書房発行、伊摯紀行より)

以来74年7月まで日本人は誰も入っておらず、私たちが9月に入域した時は日本人として2番目のグループであった。

中印国境紛争のおかげで世界一高い立派な山岳道路がスリナガルからレーを通りマナリまで900kmが開通しており、私たちはこのルートをも日本人として初めて走破した。

## スリナガル出発

9月16日、カシミール登山局のジープに4名、

レー行の定期バスに2名と荷物を分乗し早朝スリナガルを出発する。途中より何十台と続く軍用トラックに挟まれながら今日の宿泊地であるカルギルに向う。

3時間ほどでソナマルグに着く、マルグとはカシミールの言葉で草原を意味し、ソナマルグはその名の通り花と草の高原である。この高原をタジュワス山群の氷河をもった5,000m～6,000m級の山々が取り囲んでいる。ここには大きな軍事基地があり、ここから先の基地へ物資の補給をしている。軍の登山学校もあり道路傍の岩壁でアップザイレンの練習をしている。この道路は中国、パキスタン国境を守るインド軍の軍用道路として1958年全面開通した。停戦の今でも毎日何百台という軍用トラックが行き来している。そのため写真撮影も制約され、いたるところにチェックポストがある。

車はソナマルグの軍事基地をすぎると岩山の急斜面にジグザグに作られた道路をエンジンをフル回転させながら登って行く。道中は狭く軍用トラックが下ってくるたびに我々のジープは崖一杯に車輪を寄せ退避しなければならず冷汗ものである。ソナマルグは標高3,100mでこのあたりから高度の影響で頭痛や吐き気がするので基地には高度順応キャンプが設けられている。何度かジープは全輪駆動をかけて登りゾジ・ラ(ラはチベット語で峠の意味)3,529mに着く。峠の上はみぞれまじりの雨が吹きつけあたりの景色は少しも見えない。寒さも急に増しソナマルグでは半袖のシャツであったがここではセーターを着こんでもまだ寒い。道は平坦となり草原の中を行くようになる。氷河の末端が道路のすぐ傍まで来ている所もあり、いよいよ岩と雪の王国ラダックといった感じである。

ゾジ・ラは雪が多く降るところであり、あと1カ月もすれば雪のため通行止になる。この峠の町ラダックも来年5月頃まで雪に閉ざれ外界との交通はすべてストップする。ラダックは赤茶色や黒の岩と土の山、それと奥にそびえる雪山、ゾジ・ラから流れ出す泥まじりの激流と息をのむ景色である。家は土で作られ岩の上に作られている。遠くか



ら見ると窓が小さいので家か、岩か解らない。人々は冷い風がヒューヒュー吹く中で大麦の取り入れに忙しく働いている。この麦が冬を越すために欠くべからざる食料である。

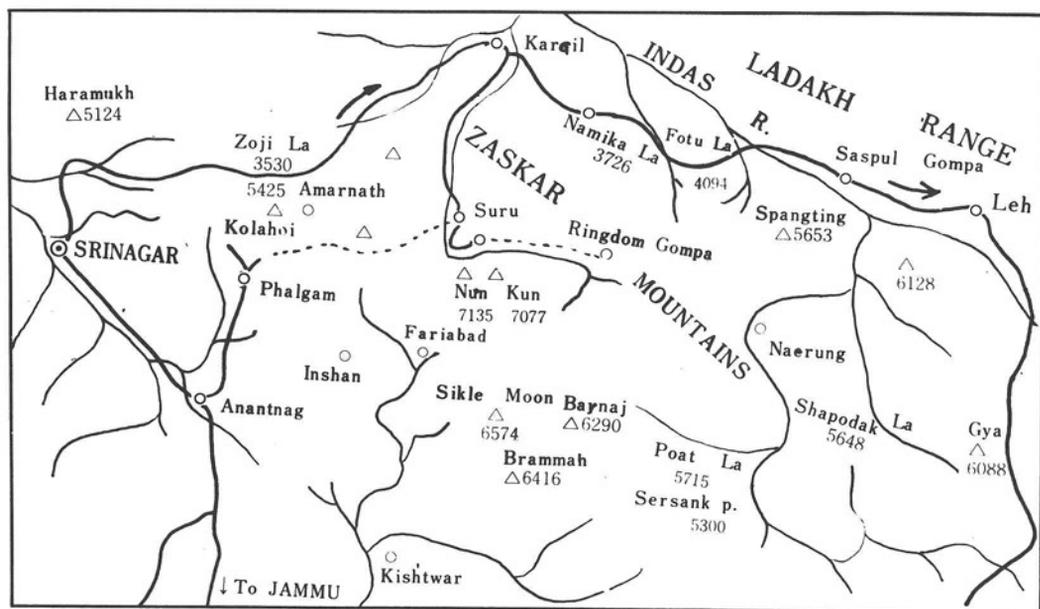
車は、しばらく川の左岸にそって進む。カルギルが近づくと畑が見えるようになる。大部分は大麥とソバが植えてある。

カルギルはスリナガル、レー間で一番大きな町である。ここは回教徒の多い町で人口7,000人、学校も図書館もあり活気づいている。バザールは道路の両側にあり生活必需品は何でも売っている。町の中心地に回教のモスクがあり早朝からコーランを詠ずる声がスピーカーから流れている。この回教はシーア派という反主流のセクトである。バ

ザールの向う側にはワッカ・チュウ（チュウは川の意味）が流れ、その向うにパキスタンのスカルドへと続く茶色の山がそびえている。現在は、印パ国境紛争で通行を禁じられているが、もし、平和になったらカラコルムを眺めながらスカルドまで1週間の4,000mを越すトレッキングは世界最高であろう。

## ヌン・クン山群へ

カルギルから一旦レーへの道を離れスルー川に沿って南下する。町を出るとすぐ軍のエリアに入りカメラを全部ザックにしまい緊張する。いつチェックされるかしれない。多くのカマボコ兵舎が並び橋のたもには銃を持った兵隊が立っている。道路は舗装が切れもうもうと砂塵をあげて走る。通過する村々は麦の取り入れに忙しく大人も子供も一生懸命に働いている。麦の収穫はまず畑から日本と同じように刈り取り次にそれを半径5m位の円になるように厚さ30cm位に積む。この上を牛か馬を数頭並ばせ何百回と踏ませる。円の中心に近い牛は歩く距離が短く一番外側の牛は速く、長く歩かなければならない。それぞれの牛は一本の綱で結ばれているため一頭が止まると全部止ってしまうためうしろから人間が牛の尻をたたき棒を持って牛と同じようにグルグル一日中廻っている。この作業がすむと風のある日に上方から少しづつ落下させ糶と糞とに分ける。これを何回か繰返し



最後に小川の中にむしろを引き流れの中で小石を選別し、麦を乾燥させ作業は終る。

村で車を停めると村人が駆け寄ってくる。このパニカルの村では丁度私達が通過してきた道路を作っている技師が英語を話し、説明してくれる。それによるとこの道路はカルギルからザスカールの主都パドンまで延長 245km を建設する予定である。現在カルギルからこのパルカチまで 132km がようやく開通した。建設費は、馬やポーターを大量に使うため 1 フィート 100 ドル以上かかる。2 年後にはこの奥の村パニカルまで 1 トントラックが通れるとなると話してくれた。私達は最初の日本人としてこの道を通った訳である。

ここまで来るとヌン・クン山群が見える。村人はヌン・クンをセール・チェマ（セール＝氷、チェマ＝木）と呼んでいる。その名の通り非常に美しい山である。1975年10月、この山に日本ヒマラヤ協会とカシミール登山局の合同登山隊が登山をおこなった。私達がここに来た目的の一つにこの山群の偵察があった。ヌン(7,135m)、クン(7,077m)はフランス隊、インド隊等に登られているが、それでもなお私達の登高意欲をわきたたせるに十分魅力を持った山である。私達はここで全員 5,000m 近くまで登りこれからレーでの調査、マナリまで続く山岳道路にそなえ高度順応をする。(つづく)

### ——H A J 名古屋集会報告(その1)——

日時：昭和51年4月9日 P.M 6:30—9:00

場所：エアーインディア名古屋事務所

参加者：増田秀穂、須賀玄郷、佳子、山田正弘、豊田妙子、金原光子、荒木健次、筋田雅則、瀧上弘子、上田竹三、米山利雄、畠井照和、久保幸治、奥淳一、沖允人、水野治朗、岩水竜峰 以上

久し振りに盛況な集会であり、増田前専務理事より去る4月4日東京総会の報告、続いて新任の専務理事となった岩水竜峰氏より就任へのいきさつ及びあいさつがあり、連絡事項に移り

- (1) 4月25日(日曜日)、鈴鹿・御池岳山行につき、沖・上田両担当者より説明。また、このような山行を2ヵ月に1回程度実施したらどうかとの意見が出された。
- (2) 5月29日より犬山において実施されるビス

タリークラブの例会につき、事務局瀧上氏及び沖氏より説明があり、地元の人達には多数参加していただきたいとお話しであった。最後に沖氏の「最後のラマ王国」のスライドを楽しんで散会した。次回5月14日。

### ——H A J 名古屋集会報告(その2)——

鈴鹿・御池岳山行

日時：昭和51年4月25日(日)

三重県の鈴鹿連峰の最高峰、御池岳(1241m)に打合せ会出席者のほとんどに若干名を加えて21名が参加した。よいお天気に全員が頂上に立った。登山中上田竹三、水野治郎の2人の“花と植物の先生”に楽しくご指導していただきながらの楽しい山行であった。次回は7月3日～4日に飛騨側、濁河温泉からの御岳山(3063m)登山を計画している。

〈ヒマラヤの本〉——長い頂稜——小王利生著

大阪岳連ダウラギリIV峰(1975)隊員である著者の個人的記録。B5版。64ページ、写真多数。非売品であるが1部1,000円、▽200円 H A J にあり。

〈スポーツ食品〉——行動食「ロマン」

そのまま食べられる落花生、ミルクなどを入れて作ったポケットに入る携帯食。30ヶ入(500カロリーで110g 500円。製作・販売元(株)全農研 東京都港区芝西久保明舟町9(岡ビル) 電話03-501-3569。H A J 東京事務所にて若干在庫があります。

### H A J 研究会々員募集

Expedition 研究会

未知の7000m峰、困難な8000m峰登攀を目指す意欲ある人で研究会の目的に賛同する人。

(〒960 福島市入江町4-15 山倉洋一)

チベット研究会

中央アジアの旅、パミール・レーニン峰の登山などチベットのことなどに興味ある人。(〒487 春日井市白山町藤山台団地327号棟209号)

以上、いずれも“ヒマラヤ・シルクロード大作戦”(H & S Plan) にむかっの準備をすすめるためです。今年度のメ切は8月末日とします。

# 新刊・旧刊

## クルドの花

五十嵐 邁著

朝日新聞社 昭50年11月15日 660円

「植物研究者の木下雄三がイラクの奥地へ「ウマノズクサ」をさがしに出かけ、マリーンというクルド生れの女性と出逢う。スパイの容疑者として掴まったりする出来事があったが、結局はウマノズクサを発見し、日本へ持って帰ることができた。しかし、雄三は何故かクルドが忘れられず、再びウマノズクサのあるクルドへ帰って行く」というストーリーで、イラン奥地の荒々しい風景もよく書けていて楽しめる。山とは直接関係はないが、このあたりの風物のことなどが出てくるし、ヒマラヤの登山報告よりはるかに面白いので紹介した。ちょっと井上靖の「城砦」に似ている。

## インドの顔

辛島昇、奈良康明著 1,200円

河出書房新社 生活の世界歴史 5巻  
昭50年12月20日

インド民衆の生活史というべき本。「言語と民族のつば」「カーストに生まれ、カーストに死ぬ」「ヒンドゥー教徒の生活」「因習と戒律のなかで一女の一生」「快樂の思想」「都市の顔、農村の顔」文献も豊富。

「生活の世界歴史」は全10巻から成っており、ヒマラヤに関係ありそうなのは、この5巻と、1巻「古代オリエントの生活」2巻「黄土を拓いた人びと」7巻「イスラムの陰に」であろう。

## 西域の古代貨幣

渡辺 弘 著 学習研究社

(Coins of Ancient Time in Afganistan)

昭48年10月1日 4,800円

著者が昭和13年から6年間、アフガニスタンの日本公館付の医師としてカーブルに滞在中に蒐集されたオリエント貨幣、千数百点のうち、特に貴重な古代貨幣、204点に解説をつけてまとめたものである。カラーと黒白の写真で示されている。アフガニスタンからこれらの貨幣を持ち帰るの

に、ソ連領トルキスタン、シベリア 8,000キロの汽車の旅、満州、朝鮮、釜山を経て日本へ運んだという。そして、戦争中も非常疎開して守ったという。著者は初代アフガニスタン協会々長であった。本書は神田の一誠堂で扱っている。

## Ladakh, the Moonland

T. SUMI, M. OKI, F. M. HASSNAIN

Light & Life Publishers, New Delhi

1975. 40Rs

3人の著者はいずれもH A Jに関係深い人であり、ラダックに何度も足を運んだ人でもある。英文であるが写真も多いので楽しめよう。

「有名なラダックの訪門者」、「ラダックの歴史」、「ラダックの人びと」、「仏教文化」、「カルギルとザスカル」、「忘れ得ぬラダック」、ルート図、ラダック語、文献など。

インドから取寄せることは可能。ただし、送料が重むので本代1,600円 送料700円+200円(日本内) 合計2,500円位になる。H A J名古屋へ申込んで下さればお世話します。

## モンゴル探検史

### —シルクロードの起点と終点—

服部龍太郎 著

新人物往来社 50年10月20日 1,300円

チンギス・ハン、マルコ・ポーロ、ベネディクト・ゴエス、リヒトホーフエン、ヘディン、スタイン、鳥居龍蔵、大谷探検隊などなど、多くの探検家の活動を軸にしてモンゴル探検史を綴っている。最後の章は「新生モンゴル」として最近のモンゴルの動きにも触れている。エピソードを語りながら軽妙な文章で読み易い。

## ネパール、インドに生ける

小原 豊雲 著

主婦の友社 昭45年5月20日 2,800円

少し前の本だが、美しい写真が多く、めずらしいものなので紹介しておく。著者、小原流三世家元が、ネパール、インド各地で花を生けて歩いたときのもの。A5版一面のカラー写真が美しい。花以外の写真も沢山ある。現地案内をした国塚一乗(20年余もインド、ネパールに住んだ人、知る人ぞ知る人物)の紀行も楽しめる。

# ヒマラヤの本・資料

※ヒマラヤ関係のものが出版されましたら紹介しますので、名古屋事務所へ1冊お送り下さい。

書名・発行年など		発行所など	頒 価	送 料
HAJ インドヒマラヤ遠征帰国報告	1975年	HAJ	600円	140円
カシミールとラダック	1974年	〃	900	100
秘境小チベット・ラダック	(地図つき)	〃	2,400	300
HAJ ガンジロバ隊帰国報告書		〃	300	0
東海山岳Ⅱ		JAC	800	100
東海山岳Ⅲ		〃	2,500	300
チベットとラダック		HAJ	1,000	200
カシミールの街と山	ネパールへの旅	〃	各 600	100
ヒマラヤの桃源境、ブータン・シッキム・アッサム		〃	2,200	300
ヒマラヤを歩き登るために、第4、5回東ヒマラヤ研報告		〃	2,400	300

「ヒマラヤ通信」「ヒマラヤ」バックナンバーは下記のものしか残部がありません。

第1号(20円)、第2号(20円)、第9号(50円)、第17号(150円)、台本製本用紙(200円)、第23～(25、27、28、35、36、38、39、42は品切)。各送料共400円に割引。会員のみにしからお分けできません。

上記ヒマラヤ関係資料の注文は先着順に受付。通信での申込は代金を添えて下さい。

〒468 名古屋市中白区一つ山1-44-7 HAJ名古屋事務所 郵便振替 名古屋 21645 番  
銀行振込 東海銀行鳴子支店 133-239番「日本ヒマラヤ協会」

郵便振替振込用紙はどこ郵便局にもあります。送金料も安くて便利ですのでご利用下さい。

〈HAJ東京事務所へのルート〉国電中央線中野駅南口下車。三菱銀行の左側、南口商店街を抜け、中野総合病院と中野郵便局の間の斜めの広い通りを左へ入ります。途中「公会堂下」のバス停を通過し(ここまで中野駅、永福町、渋谷、新宿よりバスの便がある)400m位進むと左角に自転車屋があり、そこを右へまわって200m行った右側に「沢本ビル」があります。中野駅からゆっくり歩いて15分ほどです。HAJ事務所はその1階です。金曜、土曜日の13時～20時まで担当の鈴木康志がいます。

若干のHAJ出版物は下記の店で扱ってもらっています。親切にサービスしていただける店です。

HAJ 出版 物 特 約 取 扱 店	京都……京都市下京区四条河原町東81	海南堂(四条河原町電停角)
	兵庫……宝塚市中州1丁目15-2 逆瀬川ビル内	大野屋書店
	神戸……東灘区魚崎北町1-6-10	トモミツ縫工
	大阪……北区小深町3-1(阪急三番街)	紀伊国屋・梅田店
	東京……千代田区神田駿河台2-1	茗溪堂(お茶の水駅前)
	東京……江戸川区西小岩5-18-10	小林静生書店(古書もあり)
	東京……文京区湯島1-6-1 利根川商事(株)	さくらビル内 日本山岳会
	横浜……鶴見区鶴見町3601(豊岡通り)	西田書店(古書もあり)
	仙台……仙台市一番町2-3-32	丸善仙台
	名古屋……千種区千種駅前	ちくさ正文館
	名古屋……中区古渡町4-1-6(国鉄金山駅前)	金山アルプス
	岐阜……岐阜市神田町通り4	自由書房
	札幌……中央区南3条西3丁目4番街	成美堂(札幌駅前通り)
広島……広島市本通1-7(金座街)	アカデミィ書店	
福岡……福岡市中央区天神2丁目9-110	福岡金文堂(新天町)	

## ヒマラヤの旅はヒマラヤのヨロズ屋へ

トレッキングからエクスペディション  
まで全て引き受けます。

装備貸出・シェルパ斡旋・現地食料調達  
国内外輸送手配・別送貨物通関・ヒマラヤ情報……

EXPRESS TREKKING (P) LTD.

EXPRESS HOUSE

NAXAL BHAGABATI BAHAL

P. O. BOX339 KATHMANDU NEPAL

電略 GREATREK・KATHMANDU TEL. 13017

カトマンズの宿泊は EXPRESS HOUSE  
をご利用ください。

家庭的なムードで宿泊代も安く気軽に泊れる宿です。  
特に日本のお客様には大浴場が好評です。自炊もでき  
ます。 宿泊代＝1泊朝食付30RS から

※長期滞在者はご相談に応じます。

### 日本語でお問い合わせください

インド大陸、中近東方面へ当社独自のプランをいたしております

### ツアー名

- ★シルクロード 6,000キロ
- ★ネパールとアフガニスタン
- ★砂漠の国アフガニスタンと最  
後の桃源境フンザ
- ★大ペルシャとアフガニスタン

——お問い合わせは下記まで——

### (株) ト ラ ベ ル 日 本

〒100 東京都千代田区有楽町2-2-1  
ラクチョウビル5F 電話 (03) 572-1461  
担 当———<sup>のい</sup>外池・永瀬・月候・小島

## 海外登山，トレッキングに傷害保険を

——海外旅行傷害保険(運動危険担保特約付)について研究しております——

<sup>タケ</sup> 岳 産 業 にご相談して下さい。ノ

あなたの所得を補償する保険をご存じですか？ (所得補償保険)

●所得補償1～5年，傷害特約60～120倍までいろいろあります

自動車・火災・レジャー (山岳保険・国内旅行・つり・ゴルフ・ヨット) ・普通傷害・利益  
・生産物等の私達の生活に関連した保険を取扱っています。岳産業の西田までご連絡下さい

大正海上火災 <sup>タケ</sup> 岳 産 業  
保険(株)代理店

大阪市淀川区西中島町5丁目3チサン10F 6号 〒532  
TEL 06 (304) 1115番  
●ルスノトキ=大正海上十三営業所 304-5774

# 大自然の神秘と雄々しさ、 ガッツなトレッキング——ヒマラヤ

東はブータン・シツキムから、西はガルワール・ラダック、そしてカシミールへと三千キロ。実に、ヨーロッパ・アルプスの二倍です。雄大な八千メートル級の巨峰の連なるヒマラヤを自分の足で踏みしめ、自分の肌で感じるワイルドなトレッキングは、どのレジヤーマも及ばないスケールの大きさと心の安らぎを与えます。

**ノー・公害**  
時間に追われ、人間関係のわずらわしさに悩み、たまには仕事から逃げ出したいと思っている都会のビジネスマン達。彼らにこのヒマラヤ山麓の魅力を教えてあげてください。8000m級の巨峰が連なる大自然の景観。斜面一帯を華やかに色どる花崗や氷塊をたたえているアルハルウツ湖の神秘的な静けさ。すべてが彼らの求めている超現実的な世界です。ダーズリン

**シツキム**  
ごく最近まで鎖国状態であったシツキムへ入境することができるようになりました。観光客のほとんどない現代の「桃源境」とはこのこと。王宮を中心に神秘の国が、静かなたたずまいを見せています。ダーズリンからの途中にあるカリンポンの町も、長期滞在に向いた静かなリゾート。買物も楽しい思い出になるでしょう。  
（註）シツキム入境の場合はインドのビザとは別に特別許可が必要ですが詳しくはエア・インディアにお問い合わせください。  
**ガルワール・トレッキング**  
ガルワール地区は、デリーの北東約400キロの地点にあり、1974年7月から外国人に解禁されました。ナンダデビー（7816m）や、ガンジス川の源流近くにあるヒンズー教の聖地をたずねるトレッキングや、高山植物の宝庫「花の谷」や40000mをこす山岳湖への旅が楽しめます。



世界の35都市をネットする——

## エア・インディア

東京 ● 千代田区有楽町日比谷パークビル100 ☎214-7631  
大阪 ● 東区備後町松豊ビル541 ☎264-1781  
名古屋 ● 中村区堀内町ホテルニューナゴヤ7450 ☎581-5876  
広島 ● 鉄砲町1-20第3ウエノヤビル730 ☎28-7211

発行者 柴田金之助  
編集 「ヒマラヤ」編集委員会  
名古屋事務所 ☎四六八  
東京事務所 ☎一六四  
名古屋市中区一ツ山一四十四一七  
東京都中野区中央三丁目四十五一十八  
沢本ビル1F  
☎五二一八〇一  
☎三三三六五二  
一四四一四  
二六二